



【書評】三木市史編さん委員会編『青山の歴史』
(新三木市史地域編9、三木市、二〇二三年) (<
時評・書評・展示評>)

跡部, 史浩

(Citation)

Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 16:79-88

(Issue Date)

2024-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100499193>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100499193>



【書評】三木市史編さん委員会
編『青山の歴史』（新三木市史
地域編9、三木市、二〇二三年）

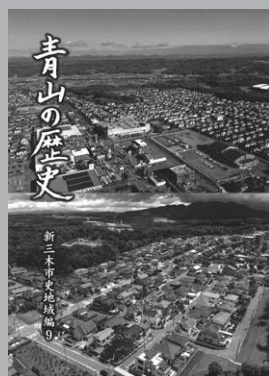
跡部 史浩

はじめに

兵庫県三木市では、二〇一四（平成二六）年より市史編さん事業が行われている。刊行予定の全一八巻中、一〇巻が公民館設置地域を単位とする「地域編」に当てられ、市史編さん室や関係者による助言のもと、住民の方々が部会を結成し、調査・執筆に取り組まれている。本書はこの地域編の第六冊目として刊行されたものである。

本書の構成は以下の通りである（章、節タイトルのみ）。

序章 青山編の取組



三木市史編さん委員会編
『新三木市史 地域編9 青山の歴史』

発行 三木市
2023年3月31日
B5判 306頁
販売価格 2,500円

詳しくは三木市HP「市史編さん室
一既刊行物のご案内」欄参照
<https://www.city.miki.lg.jp/soshiki/9/>

第一章 青山の位置、地形、地質、青山の誕生

一―一 三木市南東部の地形・地質概要／一―二 三木市南東部の地形／一―三 三木市南東部の地質／一―四 青山の誕生とその後／一―五 建築協定から住民協定のまちへ

第二章 青山のあゆみと地域活動

二―一 自治会連合会のあゆみ／二―二 各丁目のあゆみ／二―三 青山公民館と地域発展／二―四 まちづくり協議会／二―五 まちづくり協議会の行事／二―六 各種団体のあゆみ／二―七 各委員会・協議会活動

第三章 青山の施設

三―一 公共施設／三―二 教育施設

第四章 青山の生活

四―一 買い物・商業施設／四―二 医療施設／四―三

子育ての取り組み／四―四 災害

第五章 資料・統計編

五―一 青山地区関連年表／五―二 青山の統計データ

附録

(B5判・三〇六頁)

本書が対象としている三木市志染町青山地区は、後にも詳しく述べるように一九八〇年代に造成、入居が開始された、いわゆる「ニュータウン」^①である。一九六〇年代以後各地で計画、造成が進んだニュータウンについては、建築学、社会学、地理学などの分野で、開発手法に関する議論や、その後顕在化してきた高齢化問題に関する分析などが膨大に蓄積されてきた。青山地区については、「飲食関係施設」やクリーニング店などの「生活サービス関係施設」、「購買施設」といった「生活拠点機能」の立地と変遷を分析した青木嵩氏による論考がある^②。

歴史学においても、ニュータウンを対象とした文献は少なくないように思われる。代表的なものとして、『多摩市史

通史編二 近現代』は、国内最大規模のニュータウンである多摩ニュータウンについて、開発以前の地域史、開発の経過と農民による反対運動の展開、開発後の交通手段・商業施設整備の遅れなどによる不便な生活、住民運動の展開などを通史的に明らかにしている^③。同じく多摩ニュータウンを検討対象にした金子淳氏は、同地域で展開された住民運動や、ミニコミ誌を通じた消費者の啓発活動、建築家の意図とは異なった居室の利用などを、都市計画者や建築家など開発者の「実験」に対する、「住民を主語とする「暮らしの実験」」と評価した^④。二〇一八年には吹田市立博物館、パルテノン多摩歴史ミュージアムが連携して、千里、多摩ニュータウンを主題とした企画展示「ニュータウン誕生く千里&多摩ニュータウンに見る都市計画と人々」を開催している^⑤。

また、兵庫県内についてみると、大海一雄氏は県内各地のニュータウンや住宅地建設の経過、人口動態、前史となる昭和戦前期の都市計画などを検討している^⑥。近年刊行された『兵庫県史くこの五十年の歩み』では、戦後の兵庫県における住宅政策の経過が整理されており、ニュータウンの造成についても言及がある^⑦。

本稿作成までにあたることのできた文献は限られているが、

ニュータウンはその形成当初から実践的な課題設定を含む多様な研究分野で分析が進められ、近年はそこの生活が歴史学的な研究の対象になりつつあると、ひとまずは整理しておきたい。こうした中であつて、地域住民自身が開発以前の地域の歴史、そして自らの生活や自治活動を歴史としてとらえた本書全体の試みは、同様に市内のニュータウンである緑が丘地区を扱った『緑が丘の歴史』とあわせて、非常にユニークなものであると思う。以下ではまず青山地区の概要に触れながら各章のあらましを示したうえで、評者なりに感じた本書の特色や意義を論じてみたい。なお、本書からの参照箇所は基本的に（一）内にページ数を記した。

一 本書の特徴

青山地区は三木市の南部に位置し、南東部で神戸市西区に接している。現在は戸建住宅が立ち並ぶ閑静な街並みが広がっているが、開発以前の青山地区は、丘陵地に広がる「赤松の多生する雑木林で、松茸の山としても知られ」（二七頁）。「第一章 青山の位置、地形、地質、青山の誕生」では、こうした開発以前の青山地区について詳細な地質・地

層分析が行われている。また、近世・明治初期のものと推定されている絵図を用いて、近隣の入会地に向かう山道の利用なども指摘されている（二四～二七頁）。

ニュータウン造成の経過についても本章で論じられている。大和ハウス工業株式会社（以下大和ハウス）は、先行して開発していた緑が丘地区に続いて、一九八三（昭和五八）年より「松が丘ネオポリス」の造成を開始し、翌年市議会で「志染町青山」の名称が決定された。第一号の入居は一九八五年とされている（二七～二八頁）。巻末の統計によれば、二〇二二（令和四）年時点の世帯数は二二七四世帯、人口は五六四八人である。

「第二章 青山のあゆみと地域活動」は、ニュータウン造成後の自治会や各種団体の活動を論じるもので、自治会連合会および各丁目自治会の沿革や、精力的な公民館活動、地域行事、老人会をはじめとする地域団体の活動などが網羅されている。

「第三章 青山の施設」では地域内に立地する公共施設や、学校区に属する小中学校などについて、各施設の沿革・概要が整理されており、あわせて現在の利用状況の推移や、特色ある取り組みの紹介にも意が用いられている。

「第四章 青山の生活」では、大規模店舗を中心とする商業施設の設置過程、医療施設の整備状況、子育て支援の取り組みなどが扱われている。また、阪神・淡路大震災や西日本豪雨をはじめとする、地域における災害史も本章で論じられている。阪神・淡路大震災当時のボランティアの方による寄稿文も収められており、記録としても貴重である。

（二）自治活動の積み重ね

本書の特色の第一として、自治会連合会や各丁目自治会、地域団体による自治活動の積み重ねに関する叙述があげられる。特に建築協定への対応については、本書の中で繰り返して青山地区の特徴として打ち出されている。

建築協定とは、「建築基準法などの一般的制限以外に、市町村が条例で決める一定区域内で、関係権利者の全員の合意のもとに、建築の敷地・構造・意匠などについて取り決める協定」（『デジタル大辞泉』）を指す。具体的には青山地区の場合、建物は二階建てまでとすることや、擁壁・垣根の高さ制限など、全一六項目が取り決められた。本書の特色にも関わる点であるので、建築協定の適用と、以後の自治会による対応の過程を本書に沿って整理してみよう。

青山地区の造成が進められている一九八四年一二月、市議会は建築協定を同地区に適用することを決定した。この背景には、当時阪神地域の住宅地として「小規模かつ無秩序な土地利用も増加の傾向にあったため、将来都市環境の悪化を懸念していた」三木市と、「これまで開発して来た住宅地との差別化」を図りたい大和ハウスの意向が合致したことがあったという（三五頁）。

当初は建築申請の受付や、協定に照らした技術審査などの業務は、大和ハウスによって代行されていた。一九九〇年に一〇三、六丁目自治会からなる自治会連合会が発足すると、大和ハウスはそれまで代行してきた建築協定に関する業務の移管を自治会連合会に要請する。これを受けた自治会連合会の委嘱により、一九九一年各丁目に建築協定運営委員会が設立され、「近所に建築される住宅の見回り、違反者に対する建築協定の説明、啓発など」にあたった（三七頁）。青山地区全体としても自治会連合会から独立した青山地区建築協定運営委員会が同年に発足し、住宅建築に際する審査業務については建築事務所と委託契約を結ぶなどして対応した。

この建築協定は、二〇〇五年以後各丁目で順次期限切れを迎えることになっていた。自治会連合会は二〇〇一年より勉

強会などを開始して対応にあたり、二〇〇二年には青山まちづくり協議会を結成して、協定失効後も良好な住環境を保持するためのルール作りに取り組んだ。二〇〇五年、新たに住宅建築のルールを定めた「青山地区住民協定」が成立する（以上、建築協定ならびに住民協定への移行については二七〇、三〇、三五〇、四三、五〇〇、五一頁）。

この他に、住民にとって死活問題である商業施設誘致と店舗―住民間の意見調整（五一〇、五一二頁）、二〇〇四年以後の空き巣被害の多発を受けた派出所設置の要望、その頓挫を受けた青山地区生活安全推進委員会による自主的な夜間パトロールなど（二一一頁）、自治会連合会によるさまざまな取り組みが記述されている。

各丁目の自治活動についても見ると、たとえば青山地区の南端に位置し、神戸市西区と接する一丁目自治会は、一丁目を東西に走り、関西国際大学付近で行き止まりであった市道青山笠松線が、二〇〇五年神戸方面に開通することを受けて、交通量の増大による住環境の悪化を懸念する住民と市側との調整にあたった（六七〇、六八頁）。青山地区の中部で、商業施設が複数立地する六丁目自治会は、商業施設建設に伴う住宅地用地の駐車場への転用について、住民からの反対意見と

不動産業者との調整を行っている（一二三〇、一二四頁）。

上記の自治会活動の叙述に関しては、各種の施設や道路整備に伴う利便性の向上と、周辺住民による反対意見の双方に目配せがなされている。加えて、調整にあたった当該期自治会の「困惑」や「負担」にも簡略ながら言及している点が、自治活動を全体の軸としつつ、住民自身の手で執筆された本書ならではのスタンスとなっているように思われる。さらには、敬老会行事で発生した食中毒の対応、いわば自治活動の「失敗」ともいえる出来事が、「あえて記録に残しておきたい」との思いで叙述されていることが、評者個人としては非常に印象に残った（一五一〇、一五二、一六九頁）。

冒頭で触れた金子淳氏による研究では、多摩ニュータウンにおいて当初の開発計画から生じた不具合に対応しながら、「与えられた環境を自分たちのものへと主体的に読み替えていく」^⑧住民たちの営為が明らかにされている。同じく冒頭で紹介した企画展「ニュータウン誕生」も、間取りの変更や簡易型ユニットバスをはじめとする生活道具の購入などを紹介しつつ、「計画者や開発者たちが手掛けたニュータウンは、次第に生活者のものになっていった」^⑨とする。二つの指摘はいずれも都市計画者、施工業者らの計画に基づいて開発され

たニュータウンが、次第に住民たちのニュータウンになってゆく過程に力点がある。

ひるがえって青山地区においては、開発業者によって代行されていた建築協定に関する業務が、自治会連合会に委託された後、次第に良好な住環境の基礎として住民に理解されていった。最終的には期限切れを迎える建築協定を引き継ぐルールの検討そのものが、行政からも支援を得つつ、住民によって自主的に引き受けられていく。金子氏と企画展「ニュータウン誕生」による指摘は住民生活の位相に注目したものが、青山地区における建築協定への対応をはじめとする種々の自治活動もまた、同地区の住民がニュータウンを「自分たちのもの」にしていった過程といえるのではないだろうか。

また、先に触れた本書のスタンスからは、ニュータウンを「自分たちのもの」にする過程が、地域内で発生する意見の相違や利害衝突、さらには自治活動の「失敗」にも向き合っていく過程であったことが伝わってくる。地域内の葛藤、その調整にあたる「困惑」や「負担」、そして「失敗」の経験までも含んだ自治活動の積み重ねが、住民の方自身によって地域の歴史と理解されているところに、本書の面白さの一端があるのではないだろうか。

(二) 地域住民のライフヒストリー

本書の第二の特色として、全二三話が収録されているコラム「声に出して読むふるさと青山こぼれ話」をあげることができる。自治活動に関わられた住民の方の思い出や、青山地区を囲む自然環境、少女サッカーチームの活動など、さまざまな主題が時にユーモアを交えて論じられている。

造成直後の一九八〇年代後半から一九九〇年代前半にかけて青山地区に入居された方による回想や、転居・転職の履歴などに触れたものもあり、これらは資料的にも重要な意義を持つていると思う。次に引用するのは、一九八八年に入居した前川尚子氏によるコラムの一節である。

わずかな住宅の回りには虫も多く、ふくろうや猿、きつねまで見かけました。夕方になると心細くなり、用心のため早々に鍵を掛けていましたが、それでも玄関の「ピンポン」が鳴るとおっかなびつくりで、恐る恐るドアを開けては相手の方に失礼したこともありました。

日常の生活は、コープの宅配だけが頼り、バスは昼間の時刻はぽっかり空いて夕方まで走っていない。こんな

青山のスタートでした。（八四頁）

広大な造成地にまばらに立つ住宅で暮らす不安感、商業施設や交通手段が未整備な段階での不便な生活など、造成間もない地域の様子を伝えるものとして非常に興味深い。

住民が感じた新住民に対する微妙なまなざしや、地域内の葛藤に言及したコラムも見られる。たとえば井土裕子氏は、「役所の囑託として勤務していた頃、「青山」と言うと、地元の方々からは「新興住宅地はよそ者の集まり」という意識がまだ強くあつた時代でした。」（七四頁）と回想する。

また、三木市の精神障がい者家族会「ほのぼの会」の活動などに関わった伊東久雄氏は、「総合障害者支援センターは「ばたきの丘」建設に際する住民説明会において、「かなり厳しい精神障害者への不安が語られ」たこと、その後の市の説明会で市長に対し「なぜより毅然として、世間の偏見に立ち向かわないのかと詰問したこと」を述懐している（二三四～二三五頁）。職業や経歴に応じた、住民それぞれの立場からコラムが執筆されたことが、こうした地域に関する多様な語りを可能にしているように思う。

二 論点

本書の内容から論点になり得ると感じた点の一つが、青山地区の西側に位置し、同じ開発主体Ⅱ大和ハウスによって一九六〇年代後半から開発された緑が丘地区との関係性である。両地区は同一学校区となつているから、その間に一定の交流や一体性が生まれるのは当然のことではある。また、地域編は公民館を単位とするそれぞれの地域を対象にしているから、他地域との関係性それ自体を主題とすることは、本書の目的とするものではない。

これらのことをふまえたうえで、本書では青山一丁目自治会設立の打診が、行政の依頼を受けた緑が丘東地区自治会長から行われたこと（六〇頁）、自治会設立に向けて緑が丘自治会からレクチャーがあつたこと（七四頁）に言及されている点に注目したい。その他にも、青山三丁目自治会が開始されるにあたり、緑が丘地区の少年スポーツチームの話題が初対面でぎこちない住民の潤滑剤であつたこと（九九頁）、緑が丘地区の活発な子ども会活動を受けて青山地区でも子ども会活動に関する検討が進んだことなど（二八八～九九頁）¹⁰、

先行するニュータウンとしての緑が丘地区の活動が、新たにコミュニティ形成を進めようとする青山地区に影響を与えていたことが、本書では指摘されている。

さらに、前述したコラムには地域住民のライフコースとして、緑が丘↓青山、または同様に市内の住宅地である自由が丘↓青山と転居しているケースが合わせて六例みられる。自治会活動との関わりでいえば、緑が丘地区で丁目自治会長を務め、青山地区の自治会立ち上げも援助した経験のある住民が青山に移住し、その後民生児童委員を務めているケースがある（七六頁）。

もちろん、これから全体の傾向を論じることとはできない。コラム執筆者の多くが、造成間もない時期から自治会活動などに深く関与された方々であることも考慮されるべきだろう。実際には前住地や転居の動機は、各丁目の入居開始時期などによって多様であると思われる。とはいえ、一九六〇年代後半〜九〇年代前半にかけて三木市内で造成が進められた緑が丘、自由が丘、青山各地区の関係性や、これらのニュータウンが引き受けた住宅需要の内実は、本書や他の地域編による成果をふまえて検討されてよい論点なのではないだろうか。このことは、当該期の兵庫県における三木市の位置づけの一

側面を検討することにもつながると思う。

おわりに

二〇二〇年初頭の世界的な新型コロナウイルス感染症の流行は、以後約二年間にわたってさまざまな地域行事の中止や縮小、開催方法の大幅な変更を余儀なくさせた。これによる地域の活力の減退に対する不安感は、本書の随所で述べられている。

また、二〇一四年一〇月、「行政と一体となり「まちの高齢化対応」「若者が再び定住するまち」の検討を目的とした「ビジョン委員会」が設立され、青山地区西部に位置する七丁目の更地の利用方法が具体的な検討対象となった。住民側は二〇一六年にかけて住民アンケートの実施と分析を進め、高齢者や子育てに対する支援をはじめとするニーズを浮き彫りにした（一四二頁）。

その後二〇二〇年二月、三木市は大和ハウス工業株式会社と包括連携協定を結んだ。協定では、「全国の郊外型戸建住宅団地が抱えるさまざまな課題を解決する先行モデル」となる街づくりが打ち出され、緑が丘、青山の両地区はその実践

の場として位置づけられた⁽¹⁾。先述した青山七丁目については「青山7丁目団地再耕プロジェクト」が進行中であり、用途地域変更を含む計画の住民説明会、施設運営事業者の公募などが進められている⁽²⁾。本書の刊行と時期を同じくして、青山地区は非常に大きな変容を迎えようとしている。こうした経過を歴史的にとらえる試みが、再び住民の方々の手で行われることを期待したい。

評者の力量不足により、十分に言及できない箇所を多く残してしまいました。誤読や趣旨に沿わない評価なども多くあるかと思えます。関係者の皆さまにご容赦を乞う次第です。

註

(1) 日本において「ニュータウン」の語は、高層アパートが林立する団地や、青山地区のように戸建住宅を中心とするものまでを含む、多義的な単語として用いられている。この点は金子淳『ニュータウンの社会史』（青弓社、二〇一七年）二八～三五頁を参照。『青山の歴史』の中でも、地域を形容する語として「ニュータウン」「住宅地」「団地」などの語が混在している。

なお、国土交通省が①着手時期（昭和三〇年以降）、②計画戸数と面積、③「郊外での開発事業」であることを条件に作成した「全国ニュータウンリスト」（平成三〇年度版）に、「青山（松が丘ネオポリス）」は含まれている。リストアップ条件の詳細やリス

トについては、以下に示す国土交通省「宅地供給・ニュータウン」のページを参照（最終閲覧日：二〇二四年七月二九日）。

https://www.mlit.go.jp/totikensangyo/totikensangyo-tt2_000065.html

(2) 青木嵩「生活拠点機能の再編による郊外住宅地再生の可能性―三木市緑が丘町・志染町青山地区を対象に―」（『KGPS Review』二四、二〇一七年）。

(3) 多摩市史編集委員会編『多摩市史 通史編二 近現代』（多摩市、一九九九年）。

(4) 前掲金子『ニュータウンの社会史』一三六～一五六、一八三～一八五頁。

(5) 吹田市立博物館、公益財団法人多摩市文化振興財団企画・編集『ニュータウン誕生 千里&多摩ニュータウンに見る都市計画と人々』（吹田版、吹田市立博物館、二〇一八年）。

(6) 大海一雄『西神ニュータウン物語』（神戸新聞総合出版センター、二〇〇九年）ほか。

(7) 兵庫県史編集委員会編『兵庫県史』この五十年の歩み 第1巻『（兵庫県、二〇二三年）、同会編『兵庫県史』この五十年の歩み 第2巻』（兵庫県、二〇二三年）。

(8) 前掲金子『ニュータウンの社会史』一八五頁。

(9) 前掲吹田市立博物館、公益財団法人多摩市文化振興財団『ニュータウン誕生』二〇頁。なお、金子淳氏は同企画展の協力者となっている。

(10) 一九八八年に開始された青山の子ども会活動は、入居数の少なさ

などであつて緑が丘東地区の子ども会傘下として開始されている
(本書一八八頁)。

- (11) 「三木市と大和ハウス工業株式会社との「住み続けられるまちづくり」の推進に関する包括連携協定」(令和二年二月二五日付)より引用。三木市ウェブサイト「大和ハウス工業株式会社と連携協定を締結」(<https://www.city.miki.lg.jp/soshiki/6/20491.html>)よりPDFファイルの協定内容を閲覧できる(最終閲覧日:二〇二四年七月二九日)。

- (12) 「(令和二年12月20日開催) 青山地区住民説明会(資料及び要旨)」を参照。下記の三木市ウェブサイト「団地再生プロジェクト」(<https://www.city.miki.lg.jp/site/renkei/29999.html>)より説明会資料のPDFファイルを閲覧できる(最終閲覧日:二〇二四年七月二九日)。